

上月わたる

雑草の



病苦編

道なりき
如き

雑草の
如き
道なりき

病苦編

上月わたる



上月わたる(こうづき・わたる)

1934年、香川県綾歌郡飯山町(現丸亀市)出身。地方テレビ局のアナウンサーとして活躍していたが病に見舞われ職を辞し、日本全国放浪の旅へ出て数多くの知己を得る。様々な職業を経験した後、現在、国際エコロジー団体の日本代表を務める。著書に『気楽にいこうよ自然のままに』『完璧を求めるから辛くなるんだ』『後だって先だって 辿りついたら同じだよ』『雑草の如き道なりき しがらみ編』がある。

装丁・本文デザイン 緒方修一 / LAUGH IN

カバー・本文写真 飯沼 健

ざっそう こと みち びょうくへん
雑草の如き道なりき 病苦編

2014年11月14日初版発行

著 者 上月わたる

発行人 佐久間憲一

発行所 株式会社牧野出版

〒135-0053

東京都江東区辰巳 1-4-11 ST ビル辰巳別館 5F

電話 03-6457-0801

ファックス(ご注文) 03-3522-0802

<http://www.makinopb.com>

印刷・製本 精文堂印刷株式会社

内容に関するお問い合わせ、ご感想は下記のアドレスにお送りください。

dokusha@makinopb.com

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社宛にお送りください。

送料小社負担でお取り替えいたします。

© Wataru Kozuki 2014 Printed in Japan ISBN978-4-89500-182-3



雑草の如き道なりき
病苦編



まえがき

前著『雑草の如き道なりきしがらみ編』で多くのことを学び、自分自身がかなり強くなったのではないかと思います。まず、物事に対して常に前向きに考える様になりました。その結果、何でもやれば出来るんだ、という気持ちで腹の底から出て来るようになったのです。

昔から「百聞は一見にしかず」と言われていますが、自らの体験はその何百倍も、いや数字では表わせない程の力があることを確信しました。人間の持つ五感を通して、全てが我が物として、しっかりと身についていることがわかります。しかも、実践のたしにもなっている。迷わない自分をつくり、たとえ、躓いたとし



でも素早く気付くことによって、即座に修正し、前に向かつて進めることができる。とても大切な人生の処方箋となっていることに満足感を覚えています。

この満足感こそ、人生を歩むことにおいてなくてはならぬ「快」ではないでしょうか。人の身に、人の心に「快」の種が生まれる時こそ、成功への道を歩み始めたと言えるものだと言います。日常のどんな小さなことでも嫌がらずに立ち向かっていつて下さい。必ずあなたの身になって残るでしょう。

物事も口先だけでは大きな稔りを得ることは不可能です。たとえ恋をするにしても、心から愛して相手に当たっていくことです。もしそこで不発に終わったとしても、その体験はあなたの大きな大きな財産として身につくはずです。そして、次には必ず大きな波が訪れる。それは、あなたを新たな舞台へと運ぶことでしょう。あなたの潜在意識に働きかけていくことです。

では、雑草のような次の体験に耳をお貸し下さい。



二——瀬戸の夕日に別れを告げる

宇野港から見る

瀬戸の夕暮は

何とも

言いようが無い程

美しく素晴らしい

近くに遠くに

ちらばる瀬戸の島

夜の帷とほりの中に

漁火いさりびがきらきらと

見送ってくれている

宇野の町の灯も

優しく灯っている

西日本放送で

共に働いた

今井君の家が

すぐ其処に見える

今井君とは忘れられない

想い出がある

あれは宇高連絡船の

紫雲丸が

濃霧の中で第三宇高丸と

衝突した時のことである

二百名ちかくの尊い命が

朝の霧海に

消えて行ってしまった

その日当直であった

今井君と二人で

現場に急いだものである

巡視船「からくさ」に

乗せてもらい



取材に当たった
それも四日四晩の
厳しい戦いであつた
余談かもしれないが
その事件の時の
忘れられない話を
聞いてもらいたい

この朝の連絡船に
乗る為に

琴平の宿を

朝早や立ちして

琴平電鉄で

高松港に向かつていた

電車の

女子高校生の

一団があつた



ところが途中の
仏生山ぶつしょうざん駅で

変電所の故障の為
電車が動かなくな
ってしまった

一時間も

余裕を持って
宿を出て来たのに
予約していた

連絡船に

乗ることが

出来なくなってしまうた

勿論次に乗る

列車も駄目になった

引率していた先生は

大怒りでいる

「この始末を

どうしてくれる」と

駅員に詰め寄る様だ

兎も角もして

バスを用意して

高松に向かったが

連絡船の出た後である

その時も時

築港ちっこう駅事務所が

騒然となった

それもその筈

紫雲丸沈没の一報だ

もし順調に高松に

着いていたなら

この紫雲丸に乗っていた

女子高校生達なのである

先生も生徒達も

顔面真っ青になり

さっきまでの

電車の怒りは

素っ飛んでしまい

「海の神

金比羅さまの

助けでないだろうか」とまで

言い出す人も居たと

聞いている

このことは兎も角

この女子高校生が

この旅行を取りやめ

全員奉仕活動を

しようとなったことである

それぞれが

トレパン服に着替え
白い鉢巻をして
死体の安置場の
手伝いを始めたのだ
このことは
後の新聞・ラジオで
大きく取り上げられ
世の中の人々の
涙を誘ったものだ

ここでの学びは

「災い転じて福となす」
ではなく

「災い転じて修となる」
ではなからうかと
わざわざ余談として
取り上げてみたのである



それにしても
この大きな学びが
若い女子高生達にとって
人生の処方箋になったことは
間違いないことだろう



巷には
学びの種と
修だね
あると思うを
常と為すべし

心から
尽せし道は
人生の
灯りとなりて
人をうるおす

【三】——火事の現場へ飛び込んでいく

いくつもの想い出話が
頭の中をよぎって行く
会って積る話も

してみたい

それが叶わぬ今だ

駅のホームから

さよならを言って

鈍行列車の人となった

宇野線の岡山行きだ

六つほどの駅を過ぎた頃

茶屋町駅の近くでの

火炎のアナウンスが流れた

列車が茶屋町につくと

すぐ近くで大きな炎が
天をこがしている
線路に近いので
しばらく停車とのこと

その時ふと

人の命が

気になり始めた

私が「気合体」と呼ぶ

いわば、ある種の合縁奇縁
成るべくしての出逢い
その動きか何かに違いない
体が自然に動き出す

思い切って列車をおりる
リュックを駅に預けて
火事現場に走った



消防の人に聞くと
家の中で人一人が
取り残されているとのこと
それも老人であると聞いた
老人とて人に変わりない
尊い命だ

「放って置いてはいかん」
どこかで声なき声がする

かつての高松駅の
火災を思い出し
無茶とわかりつつ
濡れ合羽をかぶり
火の中に飛び込んだ
ぐったりとした老人を
肩にかついで
救出したものの